

---

# 大江戸虚言物語

小夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大江戸虚言物語

### 【Nコード】

N0832Z

### 【作者名】

小夏

### 【あらすじ】

お雪を拾ったのは自らを野狐と名乗る男だった。

## き（前書き）

完結するようつに頑張りますのでよろしくお願いします。

## 巻

お雪は自分の小さな手を口元に覆うようにして、温かい息を吹き吐けた。

かじかむ手を擦りながら、今日の寝床はどうしようかと考える。

季節はもう秋の終わり、今のような夜半には息も白くなる寒さだ。

お雪のような12の娘が耐えられるような夜ではなくなってきた。

ふらりふらりと今にも倒れそうな足取りで、人気のない夜の江戸を彷徨う。

どこかに適当な社がないかと必死に目を凝らしながら道を進む。

程なくして、町外れの寂れた場所にこれまた寂れた稲荷神社を見つけたお雪は、心底安心したように微笑んだ。

内心飛び上がらんばかりだったが、声をだすことさえ諦めるほどぐたくたに疲れていたのだ。

それなりの大きさの稲荷神社だったが、赤かったろう鳥居は変色し、屋根は一部が崩れ落ち、柱は辛うじて崩れ落ちるのを免れているような有様だった。

しかし、そんな有様こそが今のお雪にとっては、極楽のようには見え  
た。

## 式

すぐさま、苔むしたお稻荷さんに一礼して壊れた賽銭箱の後ろにうずくまって体を休める。

震える手に息を吹きかけて、また手を擦る。その繰り返しで寒さをしのぐ。

幸い、壊れた賽銭箱が良い風除けになって、冷たい刃のような風は直接あたらない。

少しは寒さがましになった頃、お雪はふと賽銭箱が気になった。

正確にはその中身が気になったのだ。

もしかしたらまだ銭があるかもしれない、そんな一縷の望みを持って賽銭箱の横の大穴に手を突っ込む。

しばらく手を入れて探っていたのだが、分つたのは一銭も賽銭箱には入っていないということだけだった。

少し期待していただけにがっかりもしたが、よくよく考えてみると当然なのかもしれないとお雪は思った。

こんな寂れた稲荷に参る人が少ないというのもあるだろうが、それ以前に賽銭箱には横に大穴が開いてるのだ。

きっと、誰かがとつくの昔に賽銭箱を壊して中身をこっそり持って行ったに違いない。

そこまで、考えて己の考えに虚しくなった。

浅ましい自分は、きっと少しでも賽銭箱に銭が残っていたら、ためらわずに盗む気だったのだ。

否、ためらいはしたかもしれない、しかし最終的には、人様の願いがこもった銭に手をかけるのだ。

それは、一晩泊めてもらっているお稲荷さんをも裏切る行為なのに。

参

そんな、してもいない行為にお雪はどんどん鬱々としていく。

骨にまで染みるような寒さを防ぐため、手や足を擦り合わせてはいるが、心はどんどん冷たくなっていった。

ただただ、己が惨めだった。

少し前まではこんなんじゃないかったのだ。

お雪は自分の格好を確認して唇の端を強く噛んだ。

こんなふうじゃなかった。

少し前までは、こんな枯れ枝のような体ではなかったのだ。

もちろん沢山贅沢ができたわけじゃないけど、おとつつあんの稼ぎで家族三人十分に食べていけた。

着物だってこんな泥まみれのものじゃなかった。

おっかさんと一緒によく洗濯したのを覚えている。

お風呂にだって家族三人よく湯屋にでかけてた。

こんな、みすばらしいお雪は記憶の何処を探してもいなかった。

どうしてこうなったんだろっ？

幸せだった頃の記憶を思い返しながら、どうしてを繰り返していく  
お雪。

眠りに落ちるその時まで、とろとろお雪は涙の一滴も見せなかった。



## 肆

そのまま数刻、眠りに落ちるお雪。

しかし、冬の夜はそう優しくはない。

眠りに落ちたと言ってもごく浅いものだ。

薄ぼんやりとした意識の中で、衣擦れと足音が聞こえる。

ゆっくりと近づくそれはお雪が目を覚ますのには十分だった。

しかし、起きてはいても、悴んだ体は動かすことも出来ず、目蓋を開ける力も入らない。

そうしているうちに、気配はすぐ近くにまで来てしまっていた。

足音はぴたりと止まり、気配はお雪を覗きこむようにして止まっている。

「何だこれは？おい鴉、縁起の悪い物が転がっているぞ」

若い男の声だと、お雪が思った瞬間だった。

「っ」

声が出せぬほどの、鋭い痛み。

冷え切った体が軋み、息をまともにすることも出来ないのだ。

お雪の目が薄く開いたが、それは薄ぼんやりとした景色を一瞬写した後にすぐに閉じてしまった。

## 伍

「なんだ、生きていたのか」

薄く目を開けた童女をチラリと見た男は、もう一度、童女を鞠のよ  
うに蹴り上げようとする。

「いやいや、野狐さんナニとどめをそうとしてるんでエ？」

「邪魔だろっ？」

「だからって、二度も蹴ることあ無いでしょうっ」

「そうなのか？」

不思議そうに首を傾げる男、”野狐”に”鴉”は長いため息をついた。

「野狐さん……」

「なんだ、何か問題でもあったのか？」

「いえ、特に問題はありませんぜ」

そうか、と野狐は一人納得したように頷くと、袖から匕首を取り出して、その刃先をお雪の心の臍の上にもっていく。

そして不自然に八々と動きを止めた。

そんな野狐の行動を鴉は、その後に残る骸の処理をどうしようかと考えながら見ていた。

骸は冬とはいえ直に腐る、腐れば虫が沸く。

そこらに埋めるのはいいが、臭いもきつくなるのだ、穴掘りは重労働になるだろう。

そう考えると、鴉は何故か童女に罪悪感が沸き俯く。

そして、鴉が次に顔を上げた時に見たのは、

奇妙なものだった。

野孤が童女を抱え上げていたのだ。

脇に両手を差し入れて持ち上げ、顔と顔を突き合わせている。

無表情で童女の顔をじっと見たかと思うと、そのまま抱きかかえてしまった。

そのまま、堂々と本殿の扉を開ける。

「ちょっと、野孤さんそんなんどうするおつもりなんでおりやすか？」

その声に、野孤はチラリと後ろを振り向く。

「気に入った飼う」

そう一言、言い残しばたりと戸を閉じてしまった。

「・・・」

飼うというならば、どこぞに売るわけではないのだろう。

ならば、何のたためにと、鴉は頭をひねる。

どれだけ頭を悩ませても分らない、しかし、だからといって野孤が稚児趣味だということではないだろう。

ここ数日、そこらの娘も夜鷹も、普通に相手をしていたとしっかり記憶しているからだ。

普通にというよりは、袖を引かれれば相手をし、好きだと言われれば相手をするような感じなのだが。

あつちにふらふらこつちにふらふらと、女をとつかえひつかえし、刃傷沙汰までおこした男。

町を歩くだけで、女から声をかけられる様な色男だ。

まさしく、女はより取り見取り。

別に野孤が稚児趣味でもいいが、まさかあんな薄汚いなりの童女を相手にすることは無いだろう。

では、何故飼うのだとい初めの疑問に突き当たる。

下賤な小悪党には下世話なことにはしか思考が行かず、結局、野孤が言った”飼う”の意味は全く持って分らない。

その内、びゅうびゅうと吹きつける風に耐えられ無くなり、中のお堂に入ろうとしたが、野孤のきつい一睨みに負けて、すぐすごとま

た外に出た。

無言の命令に負けたのだ。

「へいへい、あつしは見張りですかい」

納得がいなくても、やらねば首が飛ぶ。

全くもって理不尽な力関係だ。

ぼやきながらお堂に続く階段に腰掛けた。

頬杖をつき、ぼんやりと澄み切った夜空を見上げる。

相変わらずの風でぶるりと体を震わせながら、ここ数日の星巡りは最悪に違いないと確信する。

「こころ一帯で知らぬものなどいないという、稀代の大悪党野狐。」

それがナニを思ったのか、気まぐれに童女を拾ったのである。

明日は槍が降るかもしれない、と両手を合わせて”どうかあつしにはあたりやせんように”と信じてもない神に祈った。

## 陸

なにやら心地良い温かさ、腹の鈍い痛みという、相反する感覚で目を覚ましたお雪は、目を見開いて驚愕していた。

心地良いと思っていた温かさは、人のものであったからだ。

どういう訳か、雪の体はしっかりと抱き込まれているのである。

恐らく男のものであろうすっかりとした力に体を震わせたお雪は、恐る恐る相手の顔を見ようと顔を上げ、またもや驚愕した。

「あ

恐るべき美丈夫だったのだ。

美しい彫り物のような其れは、まるで相手が人ではない何かなのだと  
と思わせる。

ぺたぺたと、無遠慮にも顔を触りながら、ぴくりともしない男の顔  
に、もしかしたらこの御人は、神仏か何かなのではないかという思  
いがこみ上げてきた。

ついに、お雪は極楽に上ってしまったのかも知れない、と思ったの  
だ。

しかし、つついたり捻ったりしているうちに男の顔も歪み始め、目  
蓋がぴくりと持ち上がった。

その反応に一番驚いたのはお雪である。

何しろ、目覚めるとは思っていなかった。

びくりと体を震わせて、脱兎のごとく逃げ出そうと体に入力をし、しばらくの後に断念した。

体に力が入らず、うまく足が動かなかったのだ。

しばしの後、謎の美丈夫と睨みあい、お雪はとうとう根負けして、体の力を抜き顔をそらした。

そうしてようやく力の抜けたお雪の目に飛び込んだのは、極楽でもなんでもないものだった。

今も崩れそうな柱に、曇天が望める屋根。

極め付けには、部屋の中央に「寒い」とひたすら言いながら、手を

すり合わせている男がいた。

男は中央に陣取り、ひたすら焚かれている火を、親の敵のように睨み付けている。

眼光鋭いその睨みはどう見ても堅気のするようなものではない。

ましてや、極楽なわけがない。

そこで一気に目が覚めた。

冬の冷気もあってか、すっきりとした頭が今のお雪の状況がよいなものだと告げている。

まず男達の格好に大きく問題があるのだ。

二人とも小奇麗な格好をしてはいるが、鬘を結ってはおらず、垂髪なのだ。

この状況を見るに垂髪なのは、どう考えても悪党だろう。

これでちらりとしても、腕に刺青が見えようものならお雪の人生は終わったも同然だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0832z/>

---

大江戸虚言物語

2011年12月11日20時50分発行